

茨城が生んだ親分肌リーダー

株式会社関プレス 専務取締役

関 正克氏

関プレスの三代目・関正克は、専務として同社を牽引している。

「人と話すことが大好きですね。お客さんが来ても、どんどん喋っちゃうから、相手が帰れなくなっちゃうの」

そう話すとおり、よく喋る。そんな関の持ち味は、なにより情に厚い事だ。

「人が困っているとほっとけなくてね。仕事をほっぽり出してもかけつけちゃうんだ」

こんな性格が功を奏し、社内・外を問わず周囲の人間からの信頼は抜群である。

「困った時の関プレス」——
いつの間にか、こんな呼び名までついたというのだから、その信頼度がうかがえる。

関の信条は、フェースToフェースの営業だ。入社した当時、会社は傾きかけていた。そんな状況のなかで、自身の信条に従い営業を続けた。

14年経った今、会社は活気に溢れ、関は会社の顔になっている。

「実際に会って話をしないと駄目だよ。メールなんかいいけど、それだと仕事の話しができないじゃない。仕事以外の話でお客様と親しくなれば、お客様も仕事をしやすいでしょう？」

まず、自分を売るんだよね」

そんな関に、今年が目標を尋ねると、
「今年は、結婚だね。相手がいないけど」

そう言って、はにかむように笑った。関の、人生を掛けた営業が始まる。

Q 関プレスの強み

多品種少量生産への取り組みとして、単発プレスを軸に最新機械設備を導入。量産まで対応した生産体制を構築したこと。このことにより、単発から順送まで、また、二次元のプレスから三次元のプレスまで対応できるようになった。

Q 関プレスの弱み

「専務がいなくなったら……」と顧客に言われるほど、「関プレス＝専務」のイメージが強い。ある意味で、ワンマン企業になってしまっている。

Q 若きリーダー達に一言

たくさんの人と会うこと。いろんな人と会うことで、自分の考えと違う人、一緒の人と会話ができる。それが自分の財産になる。

Q 10年後の関プレス

現在の主力部門である自動車部品をさらに強化している。次世代自動車部品には、今後力を入れていきたい。そのために、現在は人材のスキルアップを意欲的に行うつもり。また、取引先の海外移転に対応する展開を図りたい。

編集部／大塚哲久
写真／今祥雄



せき・まさかつ

36歳。今では当たり前となった、カーナビ。数年前、まだまだマイナーだった頃から関連製品の開発・製造を始めるなど、先見の明を持つ。「自動車業界の10年後は？」という問いに対しては、『安全・情報・環境』の三分野が今後とも伸びてゆくのではと語る。今後活躍に期待を持たせる人物である。